第一章　総論

第一節　南九州の弥五郎人形行事

弥五郎どん、あるいは弥五郎様の大人形を神幸行事で巡行させる祭礼は、岩川八幡神社と的野正八幡宮、それに田ノ上八幡神社の例祭がある。この三ヵ所の弥五郎人形が登場する現在の祭礼次第を簡単に紹介する。

一　岩川八幡神社の弥五郎どん祭り

鹿児島県曽於市大隅町岩川に鎮座する岩川八幡神社では、十一月三日に神幸行事「弥五郎どん祭り」、五日に例祭（岩川ホゼマツリ）を行う。

岩川八幡神社の祭神は、主神が応神天皇で、神功皇后・仲哀天皇・玉依比売命・武内宿祢命を祀り、相殿神として天照大神・伊邪奈岐大神・保食神を祀っている。

三日の午前〇時四十分過ぎに、弥五郎青年部の人たちが、鉢巻きを締めて茶色の法被に白ズボン姿で雪駄を履き、拝殿の前に整列し、その中の触れ太鼓二組が拝殿にあがって修祓を受け、町に出て太鼓を打ちながら「弥五郎どんが起きっど」と叫んで一時間ほど廻る。残りの青年部の人たちは拝殿で弥五郎人形を組み立てる。三時半頃に弥五郎人形を境内に出して、拝殿前に置かれた台車に載せる。この段階では弥五郎人形の上半身はできあがっている。「弥五郎どんの起こし」といって、台車の上に立てて固定する。完全に立ち上げる前に鉾を持たせる。弥五郎どんの人形を拝殿左脇の境内片隅に移動させ、周囲に足場を組んで袴部分を巻き付けて白い帯を巻き、刀二振りや煙草入れなどを取り付けて完成させる。その後、拝殿右側の屋根付き展示場前に弥五郎人形を移動させる。午前八時四十五分、弥五郎どん人形の前で大隅弥五郎太鼓が演じられる。その後、九時十五分から神事が行われ、九時半から拝殿前で巫女舞の奉納がある。十時半から再び弥五郎太鼓が演じられる。十二時四十分に弥五郎どんが曳き出される。大隅町内の五年生が弥五郎人形の綱を曳く。神幸である「浜下り」は午後一時に出立し、その行列の先頭は弥五郎太鼓で、弥五郎どん、大傘、神主、神輿、宮仕（みやだち）、鉾や幟などの威儀物、神社総代などの関係者が続く。坂を下って鳥居を過ぎると左折し、市道を北西に進む。岩川小学校の校庭に一旦入り、その先の交差点で右折して、県道六三号志布志福山線を東南東に進む。一時四十五分頃に国道二六九号バイパス高架橋の下を弥五郎どんの人形が仰向けに傾いて潜り抜け、そのまま進行する。神輿と神主、それに神社の関係者は大隅中央公民館前の駐車場に設けられた御旅所で神事を行う。弥五郎太鼓と弥五郎どんの人形は鹿児島交通のバス駐車場まで行き、そこから引き返して、神輿の一行と合流する。合庁入口の交差点から県道七一号に入り、浜田文宝堂前の交差点を右折して、午後四時前に岩川八幡神社に戻る。現在はこれを「浜上がり」と称している。弥五郎どんの人形は屋根付き展示場に納められ、神輿還御の神事を行って、通称「弥五郎どん祭り」、岩川八幡神社の神幸行事は終了する。五日には午前十時から岩川八幡神社で例祭の神事が執行され、昼の直会の後に弥五郎人形の解体をする。

二　山之口弥五郎どん祭り

「山之口弥五郎どん祭り」は、宮崎県都城市山之口町富吉に鎮座する的野正八幡宮の例大祭で、かつては旧暦十月二十五日に行われていたが、現在は毎年十一月三日に執行されている。

的野正八幡宮は円野神社ともいい、祭神は「息長足姫命（応神天皇の母）」

「誉田別命（応神天皇・八幡神）」「玉依姫命」の三柱である。

例祭二日前の十一月一日に弥五郎どんの人形を組み立てる。

十一月三日午前九時三十分、八幡宮境内で「武将弥五郎太鼓（平成五年〔一九九三〕に結成）」が演じられる。午前十時三十分に的野正八幡宮の例大祭神事が催され、午前十一時四十分に浜殿下り（御神幸）の行列が、御神馬馬方節の「浜殿下り唄」を合図に的野正八幡宮から出立する。

神幸行列の配列は、先頭が榊に幣をつけた大麻で、神幸路を清め祓う神職で、次が二人立ちの獅子舞、「宮崎県指定 文化庁選択 山之口弥五郎どん」と書いた縦長の扁額、そして富吉小学校の児童たちが曳く弥五郎どんが進む。弥五郎どんの人形は、四輪の台車上に跨がるように搭載されている。その後ろを馬方節を歌う馬方（馬子）たち四人が御神馬一頭と共に進み、続いて神榊（懸守と神鏡）を捧げ持つ巫女二人、鼻高面をつけて鳥兜を被り、幢のついた手鉾を右手で持った猿田彦が二人続く。紺地に「的野正八幡宮」と白く染め抜いた御神旗一本、欅胴鋲打太鼓一台と宮司（横笛）一人、浦安の舞を奉納する巫女四人（山之口中学校女子生徒）、そして最後に神輿三基と稚児たちが進み、神職と氏子総代、弥五郎どん保存会員などが続く。

的野正八幡宮から参道を西に六百㍍行った所に建つ一の鳥居に到着すると、神幸行列はそこで停止し、午前十二時に宮司が鳥居北側にある池之尾権現宮を参拝する。池之尾権現宮（池之尾神社）の神祠には、八幡神である応神天皇の母神功皇后（息長足姫命）を祀っている。神祠を囲むように小さな池があり、南側の橋を渡って参拝するようになっている。その後、百五十㍍ほど東に戻り、十二時十分頃に弥五郎どんの館前の仮殿に神輿三基を安置する。神輿が仮殿に到着後、弥五郎どんの人形は参道で待機する。昔は池之尾権現宮の北東部に隣接する八幡馬場（射場）に仮殿となる土壇があり、そこに神輿を安置して杉木立に囲まれた馬場で芸能が演じられた。十二時四十分に仮殿で神事が行われ、午後一時から、仮殿前の芝生の広場でさまざまな民俗芸能が奉納される。浦安の舞、富吉小学校の児童らによる棒踊りと俵踊り、正近の棒踊り、乗平の矢旗踊り、桑原の奴踊り、中原の太郎踊り、田の神舞などである。芸能の奉納の後、午後三時二十分から仮殿で神事を行ってから、再び神幸行列を組んで、弥五郎どんの先導で的野正八幡宮に還幸し、還御祭の神事を執行して、午後四時に例大祭は終了する。

三　田ノ上八幡神社の弥五郎人形行事

「田ノ上八幡神社の弥五郎人形行事」は、宮崎県日南市飫肥一〇丁目に鎮座する田ノ上八幡神社の例祭で、昔は旧暦十月二十五日に行われていたが、今は毎年十一月十三日に執行される。現在、例祭の神幸行事には小型の弥五郎様人形が曳き出され、本来の弥五郎さまの人形は境内に安置される。

『宮崎神社誌』によれば、田ノ上八幡神社は明治五年（一八七二）から二十四年（一八九一）まで板敷神社と呼ばれていたという(1)。『日向地誌』には「彦火々出見尊」「豊玉姫」「応神天皇」を祭神としていると記されているが(2)、現在は主祭神「彦火火出見命」と共に、「神功皇后」「応神天皇」「天児屋命」「経津主命」「武甕槌命」「萬幡比咩命」「田心比咩命」「天押雲命」を祀っており、その他に七柱の神々を祀っているという。

十一月十二日の夜に宵宮祭が行われ、その後、祭りの世話人が中心となって境内の拝殿左手前に弥五郎様を組み立てる。

十一月十三日午前八時二十分、神社境内の一段下で、獅子舞の舞手四人が参加した神事が行われ、八時四十五分から社殿において神事が執行

されて御霊遷しを行い、舞手四名が神輿を拝殿に移す。九時前、社殿前の境内で二人立ちの獅子二頭による獅子舞が演じられる。九時三十分から境内下の道路で小型の弥五郎様人形を組み立てる。軽トラックの荷台に胴部の竹籠をつけた木枠を立てて固定し、頭と胴部を白い布で覆う。紫色の素袍を着せ、左手をつけて大刀を差す。弥五郎様の面を取り付け、鳥兜を被せる。続いて、右手をつけて鉾を持たせ、赤い袴を穿かせて、軽トラックの周囲を木枠で囲んで紅白の幕を周囲に垂らす。

十時三十分に境内下の道路に行列がならび、神幸行列が出立する。この神幸のことを「浜下り」という。行列の先頭は「田上八幡神社」と白く染め抜いた紺色の旗で、獅子二頭が続き、台車に載せた締太鼓と繞鉢と横笛の囃子手が進む。その後ろを榊に幣をつけた大麻を捧げ持つ神職が続き、小型の弥五郎様が曳き手の子供たちと共に進む。軽トラックに載せられた神輿が最後を進む。道路が交差する辻や家々の前で獅子舞が演じられる。田ノ上八幡神社から南下してきた神幸行列は、東西に延びる元狩倉日南線の交差点で分かれ、小型の弥五郎様人形は東に進み、神輿と獅子舞をそのまま南下して街中をめぐる。十一時過ぎに弥五郎様人形の一行は今町自治公民館に着き、そこで休憩する。その後、神輿と獅子舞の一行は今町自治公民館の前を通り過ぎ、飛ヶ峯川にかかる大田川橋の手前まで巡行してから、今町自治公民館に到着して館内に神輿を安置して休憩する。十二時、神幸行列は今町自治公民館を出立して下板敷研修センターの御旅所で神事を執行した後、田ノ上八幡神社に戻り、還御の神事を行って例大祭は終了する。以上が令和四年（二〇二二）の田ノ上八幡神社の例祭「弥五郎人形行事」の流れである。

現在、巡行している小型の弥五郎様は、昭和五十三年（一九七八）に「飫肥城下まつり」が創設された時に作られたものだという。「飫肥城下まつり」は毎年十月第三土・日曜日に開催され、日曜日の時代祭パレードでは、この小型の弥五郎様が巡行する。令和四年の例祭では、本来の弥五郎様を境内に立てていた。

『目で見る 宮崎・日南・串間の一〇〇年』には、未舗装の道路で曳かれる弥五郎様の写真と共に「巨大人形の弥五郎様（日南市飫肥・昭和三八年）飫肥田ノ上八幡神社の秋祭りに、祭礼行事の先導役として引き出される弥五郎様」という解説が掲載されている(3)。昭和三十八年（一九六三）まで、本来の大きな弥五郎様が神幸行列を先導していたのである。また、平成十九年（二〇〇七）刊行の『日向の弥五郎人形行事調査報告書』の一一九ページには、神社下の鳥居前に据えられた本来の弥五郎様人形の写真が掲載されている。

四　日置八幡神社のデオドン

弥五郎人形の三ヵ所の行事について、その概要について書き記したが、もう一件紹介したい行事がある。それは弥五郎とは呼ばれていないが、日置八幡神社のデオドンである。デオドンとは「大王殿」のことで、弥五郎と同様の大人形である。

鹿児島県日置市日吉町日置に鎮座する日置八幡神社では、毎年六月第一日曜日に「せっぺとべ」という行事を行っている。かつては旧暦五月六日に催していたが、明治四十一年から新暦六月六日になり、昭和四十六年から現行の日程になった。「せっぺとべ」と呼ばれるが、本来この行事は「御田植祭」である。「せっぺとべ」とは「精一杯跳べ」という鹿児島方言で、白装束のせっぺとべ衆（青年たち）が水を張った田の中で円陣を組んで「せっぺとべの唄」を歌い、飛び跳ねて五穀豊穣を祈願する。せっぺとべで水を張った田を踏むのは「足耕」といって、田の土

をこね回して泥田にする田植え前の農作業で、神聖な御田であるために伝えられた古い農作業の名残であるといえる。

日置八幡神社で午前九時半から神事が行われ、御田（御神田）までお下りの神幸を行う。行列は太鼓を先頭に、大幣二名、デオドン、神輿一基、神主、せっぺとべ衆と棒踊りと虚無僧踊りの踊り手である児童生徒たちが続く。行列が御田に到着すると、南西端に設けられた祭場に神輿を安置する。デオドンは祭場を通り過ぎて、御田の北西端まで進んでから、御田の方に向き直す。十時半、神輿に対して神職による神事が行われ、棒踊りが踊られる。神事が始まると同時に、御田にシベ竿と幟旗を運んできて立てて、「せっぺとべ」が行われる。それが終わると、神幸行列は神社に戻る。その後、隣接する日吉総合運動公園多目的広場のステージで、鬼丸神社と合同で、午後二時過ぎまで、御田植祭で奉納された虚無僧踊りや棒踊り、鎌踊りなどが演じられる。

五　古文献に見る弥五郎人形行事

①岩川八幡神社の弥五郎どん　天保十四年（一八四三）にまとめられた『三国名勝図会』には「万寿二年（一〇二五）、城州（山城国）岩清水宮を岩川へ勧請せしに、その後兵乱の時、当社の宝品を賊徒に奪はれて衰廃せしを、天文四年（一五三五）、檀越藤原重忠、当地頭伴兼豊造立せるの棟札あり、祭祀十月五日、其日華表（鳥居）より一町許距れる処に浜下の式あり、大人の形を作て先払とす、身の長一丈六尺（約四八五チセン）、梅染単衣を着て、刀大小を佩び、四輪車の上に立つ、此人形は土人（地元の住人）伝へて大人弥五郎といひ、又武内宿祢なりといふ」と記されている（4）。

明治三十一年（一八九八）に刊行された『薩隅日地理纂考』には、「万寿二年、山城国岩清水八幡宮（「石清水八幡宮から勧請して岩川八幡神社」の間違い）ヲ創建ストイフ、兵乱ノ時賊徒神宝等ヲ奪ヒ、且多年社殿衰頽セシヲ、天文年中（一五三二―五五）肝付氏再興セシトイフ、棟札ニ天文四年、檀越藤原重忠、当地頭伴兼豊造立トアリ、例祭十月五日ナリ、此日華表ヨリ一町許ノ所ニ神輿浜下ノ式アリ、大人ノ形ヲ造リテ先払トス、身ノ長一丈六尺、梅染ノ単衣ヲ着、大小刀ヲ佩ヒテ、四輪車ノ上ニ立ツ、土人是ヲ大人弥五郎ト唱フ、或ハ武内宿祢ナリトモ云フ」と記し、三国名勝図会を参考にしながら、独自の情報を少し付け加えている（5）。

②的野正八幡宮の弥五郎どん　『三国名勝図会』には「的野正八幡宮、吉富村に在り、本社隅州国分正八幡宮なり、和銅三年（七一〇）勧請す、往古三俣院の崇廟にして、大社なりといへり、正祭十月二十五日、此祭日、当社より申酉方四町余、路傍御手洗池の側に仮殿を設け、三つの神輿を守り下る、是を濱殿下りといふ、中の神輿を第一と定め、儀衛旧式あり。且大人弥五郎と呼で、朱面を被ふり、刀大小を佩きたる、一丈（約三〇三センチ）余の偶人を作り、四輪の車に乗せ、十二、三歳の童子衆多の人数にて、行列の先さに推す、上古大隅隼人の征討の故実なりといへり、其権輿詳かならず、また其儀衛の中、多くの武具を用ふ、是は北郷忠相、当邑を領するの時始るといひ伝へ、昔は流謫馬もありし」と記されている。なお、北郷忠相（一四八七―一五五九）は戦国期の武将である。

『薩隅日地理纂考』には「的野神社　奉祀三坐、仲哀天皇、神功皇后、応神天皇　祭日二月初卯日、十月二十五日、」社伝ニ和銅三年ノ創建ニテ、往古三俣院ノ宗社ナリ、申酉方（西南西）四町許ニ御手洗池アリ、十月ノ祭ニハ池ノ側ニ仮屋ヲ設ケ、三ツノ神輿ヲ守リ下ル、是ヲ浜殿下リトイフ、又長一丈余ノ偶人ニ布ノ衣ヲ着セ、大キナル両刀ヲ佩セ、面ニ朱

面ヲ被セタルヲ、四輪車ニ乗セ、余多ノ人ヲシテ神輿ノ先ニ曳ク、是ヲ大人弥五郎ト号シテ、熊曽梟帥カ形状ヲ模セルナリトイフ（以下略）」と記されている。ここでは、偶人は熊曽（熊襲）梟帥であるという。

③田ノ上八幡神社の弥五郎様　平部嶠南（一八一五―九〇・飫肥藩家老・宮崎県地誌編集係）が明治九年（一八七六）から明治十七年（一八八四）にかけて実地調査をして『日向地誌』を作成したが、これに「長人弥五郎トテ、長一丈有半ノ偶人ニ衣袴ヲ着セ、長刀ヲ佩ヒ、右手ニ長槍ヲ杖ツカシメ、之ヲ四輪車ニ載セ、群童ニ挽シメテ、街上ヲ巡ス。極テ古俗ナリ」と記され、高さ一丈有半（約四五五センチ）の弥五郎様の人形の巡行は「古俗」、すなわち江戸時代から伝えられているものだと述べている(6)。

④日置八幡神社のデオドン　『三国名勝図会』巻之九に「八幡宮、日置村にあり、奉祀天照大神、天津彦々火瓊々杵尊、栲幡千々姫命の三坐、按るに水引八幡新田宮を勧請せしなるべし、祭神彼宮と同じければなり、九月十五日を正祭とし、竹偶人を作り、四輪車に乗せ、里童をして前路を馳せしむ、又五月六日に祭りあり、土俗及び隣郷より踊を興行すること数隊なり、既にして、神輿を田原へ護り行くの旧式あり、文禄四年、島津下総守常久、当邑に封ぜられ、当社を以て闔邑の総鎮守と尊恭せり、是より村民亦一入の崇敬を致す」と記されている。

『薩隅日地理纂考』は『三国名勝図会』を参考に、次のように記している。「奉祀天照大神、天津彦々火瓊々杵尊、栲幡千々姫命ノ三坐ニテ、水引八幡新田宮ヲ勧請セシトイフ、九月十五日ヲ正祭トシ、竹偶人ヲ作リ、社殿ニ納ル所ノ大王面ヲ着セ、梅染ノ衣服ニ大小ナル木刀ヲ佩ク、四輪車ニ乗セ、里童ヲシテ前路ヲ馳セシム」

これによると、江戸末期には竹偶人（デオドン）が巡行するのは旧暦九月十五日の正祭の時で、四輪車に載せられていたというのである。この「正祭」は豊穣感謝の祭りであったと考えられる。それに対して五月六日の祭り、現在の「せっぺとべ」の行われる御田植祭では、デオドンの巡行はなく、田原（御田）への神幸に随伴する踊り子たちが、幾種類もの踊りをしていたのである。

第二節　山車行事としての弥五郎人形

一　王面から弥五郎どんへ

なぜ、弥五郎どんのような地域的特色の強い先駆としての大人形が創り出されたのだろうか。出村卓三氏は、神幸行列の先頭で掲げ持たれる王面に由来すると考察している。詳細については本報告書の第五章第三節「弥五郎面」を読んで頂きたいが、出村氏の論説を簡潔に紹介したいと思う。

南九州には奉納された信仰面が多い。信仰面には奉納面・掛け面・巡行する面があり、憤怒形相の面が多い。奉納面は阿吽一対に作られ、その中には、面裏に「王面」と墨書された事例が十五件ある。掛け面は阿吽一対で社殿の柱に掛けられる面で、奉納面に似たものが多い。巡行する面には「猿田彦」とか「火王・水王・風王」と呼ばれる天狗鼻系の面と、「神王面」と総称される大鼻面系の二系統がある。巡行する面は神幸行列の先頭を進む、旗や鉾などの柄に吊されていることが多い。神王面という呼称は、寛元四（一二四六）年の新田神社文書（薩摩川内市宮内町・薩摩国一宮）に記されており、鎌倉時代まで遡れるという。

出村氏は揖宿神社（指宿市東方）の浜下りでの、神王面から偶人化し、さらに大型化していった近年の過程から、弥五郎どんも神王面が偶人化したのかもしれない、と述べている。

これは弥五郎どん人形の成立過程を推測する上で、極めて合理的な考察ではないかと思われる。しかし、揖宿神社の場合は、岩川八幡神社など三ヵ所の弥五郎人形の影響を受けて偶人化したもので、岩川八幡神社など三ヵ所の弥五郎人形は、どのような契機で偶人化したのだろうか。

北部九州には山車行事が多いが、単体の人形を載せた山車はほとんどない。江戸における祭礼の出し物の最も古い絵画資料は万治二年（一六五九）に制作されたと考えられている「江戸天下祭図屏風」である。それには、山王祭りに人形を載せた出し物が登場する。吹貫の舁山などと共に人形を載せた傘鉾の舁山が描かれているのである。この人形を載せた笠鉾の舁山は車輪の着いた曳山となり、二輪の笠鉾や重層型山車などに発展してゆく。天保五年（一八三四）から七年にかけて刊行された『江戸名所図会』「山王祭」の麹町一丁目の「御幣に猿」の笠鉾は、人形自体はそれほど大きくはないが、見上げるほど高い舁山である。この時期には人形を載せた山車も各地で見られるようになる。神田祭の山車は飾りである人形などが際立つように作られていた。このような江戸の祭礼の様子は浮世絵として描かれて大量に刷られていた。

参勤交代で出府した薩摩藩の人たちが、江戸での祭礼を見たり、浮世絵を持ち帰ったと考えてもおかしくはないだろう。人形を載せた山車の情報は伝聞や浮世絵でまたたく間に広まったであろう。このような情報を契機に、弥五郎どんの人形山車が成立したのではないかと考えられるのである。

出村氏によれば、薩摩国一宮の新田神社（薩摩川内市）の文書で、元享三年（一三二三）の「新田宮神人等名帳」に「猿田彦大神御車引二十五人」と記されているという。この記録が正しければ、非常に早い段階で薩摩国において人形山車が成立していたことになる。ただし、この資料については、中世史の専門家による史料批判を待ちたいと思う。

二　弥五郎人形と台車

三ヵ所の弥五郎人形、それにデオドン人形は、いずれも木骨竹籠で成形するのが基本であった。また、四者ともそれぞれ特徴のある外観を持っ

ている。その人形の形状について簡単にまとめてみた。なお、これら四体の大人形は六つ目編みの竹編組で成形される。六つ目編みは三方向から竹ヒゴを組み込み、隙間を大きく取れるにもかかわらず、変形に強い頑丈な編組方法で、軽量に仕上げることができる。

弥五郎どんの台車の構造については三者三様で、現在、神幸行列で木構造の在来型台車を用いているのは、的野正八幡宮の弥五郎どん人形だけである。

弥五郎人形の台車は小型で、運行時にはまったく目立たない。大人形としての弥五郎どんを際立たせることを主眼に置いた構造なのである。このような大人形と台車との関係は、地域的特色であるとしか言いようがなく、弥五郎人形行事の特徴といって良いだろう。

①岩川八幡神社の弥五郎どん

岩川八幡神社の弥五郎どんの全高は、四・八五㍍ある。台車が自動車のシャーシを使うようになった時、シャーシと連結しやすいように、二本の木製の柱の代わりに鉄骨を用いるようになり、現在はスチール製の円筒形の骨格枠を用いている。人形を形作る竹籠は頭部と胴部が一体となっている。太くて丈のある円筒形の胴部の上に細くて丈の短い円筒形の頭部を一体で編組したものである。頭部に晒布を巻き付けてある。胴部上端に先を細くして伸ばした竹籠製の左右の腕を丈夫な紐で結びつけ、上衣の袖を通してから両腕を胸前で合わせるように曲げる。単衣の上衣と袴は梅染め（茶色）の木綿布である。頭上に梅染めの円形綿入れを被せ、頭部を梅染めの布で巻いている。頭上には鳥の首と尾の鳥形を取り付けて白の鉢巻きを締める。弥五郎どんの面は上下二本の綱で結びつけている。腰に白い木綿布での帯を巻いて大小の刀を差し、巾着と煙草入れを下げる。両手先は作られていないが、両手先を袖で覆ったようにして、長さ三・一八㍍の鉾を持つ。鉾の上部には御幣を下げる。

弥五郎どんの面は壮年の男を表し、薄肉色地に眉と髭を黒く、眼球を金色に塗り、開けた口から白い歯と上下の牙が見える。

岩川八幡神社の弥五郎人形の古い木製台車は昭和二十二年（一九四七）に作られたもので、大隅文化会館のロビーに展示している弥五郎どん人形を載せて現存している。四角い車台の前後の横桁の両端を細くして軸木にして、輪切りにした木（松材か？）を車輪としてはめ込み、軸木の外側にクサビを打ち込んで固定する。その横桁の中央に内側に傾けた柱を前後に立てて長い棟木を支える。この前後の斜柱には小梁を渡して固定する。前後に伸びる棟木に、弥五郎どん人形の軸となる二本の柱を立てるのである。左右の前後方向の梁には三角構造になるように斜柱を三組立てて棟木を固定する。各部材は錆びついて緩くなる鉄金具を使わず、継ぎ手や木組み、クサビで接合している。細い板を車台に組み込んでブレーキとして用い、方向転換には台車の後ろを長い木製の棒の梃子で持ち上げて進行方向を変えていた。昭和四十五年（一九七〇）に、神社の石段にシラス（細粒の軽石や火山灰）を敷いていたが、セメント舗装にして中型トラックのシャーシを転用した台車を用いるようになった。

岩川八幡神社は字川崎の元八幡と呼ばれる場所に鎮座していた。かつては浜下りでは神社から一町ほど先の前川と菱田川の合流地点まで行くだけだったが、明治時代になると八幡橋を渡って町の方まで行くようになっていたという。社地は前川と菱田川に挟まれた平地で、洪水の危険性があるため、大正三年（一九一四）に大字岩川の現在地に遷座したが、その社地は丘陵上に位置している。中世の岩川城跡で岩川八幡神社に合祀された熊野神社の跡地でもある。神社から道路へ下る坂道があまりに

も急傾斜で、途中で折り曲がっているため、板のブレーキだけで制動するのは困難だろうと考えられる。制動できなければ、弥五郎どん人形は暴走しかねず、危険極まりない。神社の倉庫に保管されている船の操舵輪のような木製の装置や鉄製大輪ギヤは、弥五郎人形を傾かせるためだろうという。この場合は坂道を下るときに仰向けにして、バランスを取ったのであろう。また、キンマ（木馬・木材運搬用の木製橇）のように、台車後部に結びつけた綱を坂上の大木などにからませて、少しずつ延ばしながら坂道をゆっくりと弥五郎どん人形を下ろしていったのではないかと推測される。

現在使用されている台車は、頑丈なラダーフレーム（梯子状車台）の古い乗用車のシャーシを利用したもので、四輪のタイヤとハンドル、ブレーキ機能を残している。これは神社から道路へ安全に弥五郎どん人形を下ろすための措置であると考えることができる。なお、この鉄製台車には「寄贈 鹿児島弥五郎会 平成十六年（二〇〇四）十一月三日」と記された銘板が貼ってある。

岩川八幡神社の弥五郎どんの台車

②的野正八幡宮の弥五郎どん

的野正八幡宮の弥五郎どんの全高は、台車を含めて約四・八〇メートルある。人形は竹を編んで大の字形に成形されており、頭部・胴・四肢が揃っている。両手は短く水平に突き出し、脚は逆V字形に広がっており、台車の三角形の枠木に跨がるように載せる。装束は梅染めの麻布製で、上衣は袖丈の長い単衣で、これに同様の麻布の袴を穿いて帯を締める。頭部を覆う頭巾も梅染めの麻布製で、頭上左右が突き出すようにする。黒塗りの三叉の鉾を後頭部につける。大小の刀を腰に差す。

弥五郎どんの面は赤地に塗られて壮年の男を表し、眉と髭を黒、眼球と歯牙を金色に塗る。両耳から黄色の房を下げる。

的野正八幡宮の弥五郎どんの台車は、左右の梁前後の外側に車輪がつく四輪車で、前後の桁から三角構造になる斜柱が立ち、最上部の棟木を支えるようになっている。この棟木にまたがるように弥五郎人形を載せる。台車は全高一七一センチあるが、そのほとんどが弥五郎人形の着物の裾で隠れてしまう。

的野正八幡宮の弥五郎どん

的野正八幡宮の台車
『日向の弥五郎人形行事調査報告書』より

③田ノ上八幡神社の弥五郎様

田ノ上八幡神社の弥五郎様の全高は約七㍍ある。台車上に立てた四本の木柱の後ろ二本に桟木を梯子状に組み、前と両横に湾曲した桟木を組んで、胴体部の骨組みにして、胴体上部にぐるりと割竹を六つ目編みにした編組品を取り付ける。胴体上部には両手を取り付けられるように、両側に突き出した矩形の枠横木を肩のように取り付けている。その上に頭部となる四角い枠木を載せる。頭部に白い木綿布の袋を被せ、胴体に白い上衣を着せて白布製の帯で締める。その上に紫色の素襖を着て赤い袴を穿き、朱鞘の大刀を差す。烏帽子を被る。右手は鉾を持ち、左手を大刀に添える。両手は木製で肩から吊り下げる。弥五郎様の面は赤く塗られ、眼は金色に塗られ、髪の毛・眉・髭は金色の繊維を植毛している。小型弥五郎人形の場合は両手は樹脂製で、紫色の素襖には庵木瓜紋を白く染め抜いている。木瓜紋は飫肥藩主伊東家の家紋である。

弥五郎様の台車は、前後の長い桁の先端を細く削って軸にして、そこに切った丸太の車輪を取り付ける。梯子状の梁で前後の桁をつなぎ、そこから四本の柱を立てている。台車から上は人形に穿かせた袴で隠れてしまう。

田ノ上八幡神社の弥五郎様の台車

田ノ上八幡神社の弥五郎様

田ノ上八幡神社の小型弥五郎様

④日置八幡神社のデオドン

日置八幡神社のデオドンの現在の人形の全高は二・九四㍍で、新しく作られた四輪台車に載せている。平成二十年（二〇〇八）の造替以前の全高は二・一八㍍で、『三国名勝図会』では「四輪車に乗せ」ていたというが、デオドン人形の造替までは、人形を輿に載せて運んでいたのである。

日置八幡神社の場合、平成二十年以前の古いデオドン人形について書き記す。輿の上に竹の編組品の人形を載せるが、頭部と胴部、それに両脚は六つ目編みの籠で、この編組品には二本の木製支柱がついており、項部に横木を載せる。胴上部の両側にくの字に曲げた割竹がついており、これが

デオドン（大王殿）2006 年

両手となる。梅染め木綿の単衣と袴を穿き、帯を締める。布の色はどちらかといえば柿色に近い。デオドンの面は白地で、瞳と眉を黒く塗り、口元にわずかに紅をさす。髪の毛と髭は苧（からむし）を植毛してある。

三　人形山車としての弥五郎どん

弥五郎どんの大人形が小型の四輪台車に載せられて巡行することは重要である。これは一種の人形山車であるといえる。しかし、これだけ巨大な人形が、目立たない低い台車に載せられて、神幸行列で巡行するのは全国的に見てもあまり例を見ない。そのため、弥五郎どんの大人形は、自ら歩いているような錯覚を起こすほど、神幸行列の人々の背丈よりも遙かに高い巨体を人々に印象づけるのである。

巨大な大人形を載せる山車行事として、千葉県香取市の「佐原の大祭」と福井県坂井市の「三国祭り」がある。佐原の大祭の山車は四輪二層構造の曳山で、一層目は囃子方が乗り、周囲に跳高欄を廻した二層目は露天で、「人形柱」、あるいは「迫り出し」という真柱を中央に立て、その先端に「飾り物」と呼ぶ巨大な人形や作り物を取り付ける。三国祭りの山車は二輪二層の曳山で、下層は囃子方が乗って、高欄を巡らせた上層に大人形を搭載する。いずれも大人形が目立つが、その基礎は二層構造の山車である。これらの大人形搭載の山車から比べると、弥五郎どんの台車は簡素で、それぞれ一基しか巡行しないため、逆に弥五郎どんの大人形の存在感が増すのである。

第三節　岩川の弥五郎どんの特色

一　大隅と薩摩での大人伝承の相違

南九州の大人伝説の詳細については、勝目興郎氏の執筆された第六章第三節「弥五郎どんの伝説・伝承」を読んでいただきたい。ここではその要約を大隅国と日向国、それに薩摩国とに分けて、「表 九州南部の大人伝説」としてまとめさせていただいた。旧大隅国地域では、霧島市と姶良市の二例が大人を「うどどん」としているだけで、他はいずれも「弥五郎どん」である。また、旧日向国地域では宮崎市と新富町の2例だけが「空つくどん」で、他は「弥五郎どん」である。ところが、旧薩摩国地域では「デオドン（大王殿）」「大鬼」「天狗」「うどどん」「巨人」「大人」「大男」「隼人」と、さまざまな名称で表現されるが、「弥五郎どん」という名称はまったく使われていない。

南九州に住んでいた隼人は、東西に分かれて二系統あった。『日本書紀』天武天皇十一（六八二）年七月三日の項に「隼人、多（さは）に来（まうき）て、方物（くにつもの）を貢（たてまつ）れり。是の日に、大隅の隼人と阿多の隼人と、朝廷に相撲（すまひと）る。大隅の隼人勝ちぬ」という記事がある（7）。

律令制の成立した七世紀中期以降、宮崎県と鹿児島県の本土部分を含む地域に「日向国」が成立した。大宝二年（七〇二）の薩摩・多褥の叛乱を契機に、その年の十月三日までに現在の鹿児島県西部にあたる阿多を唱更国として日向国から分離した。その後、薩摩国という名称になったが、それ以降、阿多隼人は薩摩隼人と呼ばれるようになる。そして、『続日本紀』の和銅六年（七一三）四月三日の項に「日向国から肝坏・贈於・大隅・姶羅の四郡を割いて、初めて大隅国を設けた」と記されている。

「弥五郎」という名の大人伝説は、薩摩隼人ではなく、大隅国と日向国

の隼人たちが伝承してきたのである。大隅国と日向国に関わる古代の事件として、考えられるのは、養老四年（七二〇）に勃発した「大隅日向の隼人の乱」以外思いつかない。

	伝説伝承地	伝説・地名
旧大隅国地域	曽於市 大隅町	・岩川八幡神社の弥五郎どんの人形行事 ・弥五郎ばっけ（畑）・弥五郎どんの足跡・弥五郎どんの右足の跡
	曽於市 末吉町	・弥五郎どんの右足の跡（小字矢五郎）・小字大人・弥五郎どんの足跡３ ・弥五郎どんのモッコ運び伝説２・小字「矢五郎」・小字「大人」
	曽於市 財部町	・弥五郎どんの足跡・弥五郎どんが母智丘の谷から高之峯まで跨いだ ・弥五郎どんの逸物が落ちたという地名「前玉」
	霧島市 福山町	・小字「大人足形」＝弥五郎どんの窪地
	霧島市 国分	・野口村枝之宮（現国分野口東の枝宮神社）に大人矢五郎別名川上梟師の四肢を埋葬したと伝える（『三国名勝図会』『薩隅日地理纂考』） ・うどどんの片足跡（所在不明）
	鹿屋市 輝北町	・弥五郎どんの足型・弥五郎どんのモッコ運び伝説 ・弥五郎どんが桜島の頂上に釜をかけて塩つくりをした
	志布志市 有明町	・弥五郎どんの足跡・弥五郎どんの片足の跡 ・弥五郎どんのイネサシ運び伝説
	志布志市 権現島	・弥五郎とんのホゲ（岩穴）
	志布志市 志布志	・弥五郎どんの足跡（小字「大人足」）
	姶良市 姶良町	・弥五郎どんの足跡
	姶良市 加治木町	・うどどんの片足跡
旧日向国地域	都城市 山之口町	・山ノ口の弥五郎どんの人形行事・弥五郎どんのモッコ運び伝説
	都城市 都城	・弥五郎どんの足跡・妻ヶ丘の弥五郎どんのモッコ運び伝説
	都城市 高城町	・弥五郎どんの足跡
	日南市 飫肥	・田ノ上八幡神社の弥五郎様の人形行事・弥五郎様の足跡と腰掛け山 ・弥五郎様が酒谷川をはさんで小便をした
	宮崎市 清武町	・弥五郎どんの足跡・弥五郎が溝の土手崩れ防止に大岩を置いた伝説 ・弥五郎どんが荒平山に腰掛けて青島で手を洗った
	宮崎市 田野町	・弥五郎どんの足跡・弥五郎が鰐塚山とバラマツダケに足を置いた
	川南町	・七股弥五郎の右足形・南の人の弥五郎は日向灘を七股で歩いた ・弥五郎が尾鈴山に座ったら、足が延岡と飫肥に届いた
	都農町 新田	・七股弥五郎の左足形
	新富町	・空つくどんのモッコ運び伝説 ・新田原古墳群最大の前方後円墳を弥五郎塚と呼ぶ ・空つくどんの足跡２
旧薩摩国地域	日置市日吉町	・日置八幡神社のデオドン（大王殿）
	日置市 伊集院町	・大鬼が飯牟礼山をたたいたら矢筈岳と諸正岳に分かれ、桜島をたたいたら噴火した・大鬼の足跡が上池と下池になった
	日置市 吹上町	・天上岩野内側に天狗が残した大きな手形がある
	さつま町 宮之城	・うどどん伝説
	薩摩川内市 樋脇町	・巨人の片方の足跡・巨人が山を持ってきて丸山になった。
	薩摩川内市 祁答院町	・巨人が山を持って行き、その跡が薗牟田池になった。
	阿久根市	・大人足跡（『三国名勝図会』）小字「大字」「小人」
	伊佐市 大口	・大男のモッコ運び伝説
	湧水町 吉松	・霧島の大男が川内川をせき止めた伝説と大男のモッコ運び伝説
	鹿児島市	・隼人の足は桜島に届き（『三国名勝図会』）

表　九州南部の大人伝説

二　大隅日向隼人の乱

ここで奈良時代の「大隅日向隼人の乱」について史資料をもとに見ていきたい。『続日本紀』の大隅日向隼人の乱の記述は簡潔である（8）。

①「養老四年（七二〇）二月二十九日：大宰府が奏言した。隼人が叛乱を起こして、大隅国守の陽侯史麻呂を殺害しました」

②「同年三月四日：中納言・正四位下の大伴宿禰旅人を、征隼人持節大将軍に任命し、授刀助・従五位下の笠朝臣御室、民部少輔・従五位下の巨勢朝臣真人を副将軍に任命した」

③「同年八月十二日：次のように詔した。隼人を征討する持節将軍の大伴宿禰旅人はしばらく入京させる。ただし副将軍以下の者は、隼人が平定し終わっていないので、留まってそのまま駐屯せよ」

④「同年七月七日：征隼人副将軍・従五位下の笠朝臣御室・従五位下の巨勢朝臣真人らが帰還した。斬首した者や捕虜は千四百人余であった」

養老四年、大隅日向の隼人の反乱が広がり、二月二十九日には大隅国守陽侯史麻呂（やこのふひとまろ）が殺害されたため、三月四日に政府は中納言大伴旅人を征隼人持節大将軍に任じると共に、笠御室（かさのみむろ）と巨勢真人（こせのまひと）を副将軍に任命して鎮圧にあたらせることになった。この隼人征討の軍事行動は翌年7月まで行われ、斬首した者や捕虜は千四百人余りであったという。今よりも遙かに人口の少なかった頃、千四百人余りの死者と捕虜を出したのだから、敗戦がこの地域に与えた影響は大きなものであった。それは地域社会に深いトラウマを与えたと考えられる。

もう少し、大隅日向隼人の乱の詳細を見てゆきたい。『八幡宇佐宮御託宣集』は、宇佐の八幡宮側から見た隼人の乱の様相を記している（9）。宇佐八幡宮弥勒寺学頭の神吽が、源平の騒乱によって神宮の本縁起が紛失したのを嘆き、二十三年の歳月を費やして正和二年（一三一三）に完成させた、宇佐八幡宮の創祀以来の由緒・縁起・旧記・託宣を集成した全十六巻の記録である。隼人の乱から六百年近く経ってまとめられたものであるが、出典を明示しており、その編纂思想は極めて合理的なもので、当時存在した歴史資料と伝説をそのまま掲載していると考えられるのである。

①「豊前守将軍（豊前守正六位上宇努首男人）、大御神を請じ奉る。祢宜辛嶋波豆女、大御神の御杖人と為り、御前に立ち、彼の両国（大隅日向）に行幸す。此の時彦山権現、法蓮・華厳・覚満・体能等、倶に値遇し、同じく計を成し給う。仏法よりは悪心を蕩かし、海水よりは竜頭を浮べ、地上よりは駒犬を走らし、虚空よりは鷁首を飛ばす。隼人等は大いに驚き、甚だ惶る。彼の両国の内に、七ヶ所の城を構ふ。爰に仏法僧宝の威を振ひ、各大力を施し、二十八部衆を出し、細男傀儡子の舞を舞わしむる刻、隼人等は興宴に依って敵心を忘れ、城中より見出でしかむる時、先づ五ヶ所の城 奴久良 神野 牛屎 幸原 志加牟 の賊等を伐り殺す。今二ヶ所の城曾於の石城 比売の城 の凶徒、忽に殺し難き間、託宣したまはく。須く三年を限って守って衆賊を殺さん。神我、此の間を相助けて、荒振る奴等を伐り殺さしめてへり（と言えり）」

②「聖武天皇元年、神亀元年（七二五）甲子に託宣したまはく。吾れ此の隼人等多く殺却する報には、年別に二度放生会を奉仕せんてへり」

③「殺業の罪障を懺悔せんが為に、五人の同行（八幡大菩薩・法蓮・華厳・覚満・体能）、一味同心して放生会を修められ、永代の例と為す。大菩薩は小倉山に移住して弥勒菩薩を崇め奉り（弥勒寺）、法蓮和尚は山本に於て虚空蔵菩薩（虚空蔵寺）を崇め奉り、華厳は郡瀬 法鏡寺なり に於いて如意輪菩薩を崇め奉り、覚満は来縄郷に於て薬王菩薩（薬恩寺）を崇め奉り、体能は六郷山に於て薬師如来を崇め奉る。皆以て伽藍等を建立せらる」

④「八月十四日大菩薩和間の浜に遷行し、御頓宮に入りたまふ。当会の為体、奇麗にして甚だ 妙なり。九品の浄刹（阿弥陀浄土）の荘厳を移し、二十五菩薩の舞楽有り。同じき夜に六根懺悔の行法有り。伝戒、乞戒の儀式有り。同十五日潮半満の時、大菩薩浮殿に出て御ふ。法蓮和尚等、導師已下を勤行し、放生陀羅尼を唱え、大乗経文を誦せしむ。此の間に、鱗貝の生命を買ひ放ち、深甚の法命を施与す。又嚢日の様を表し、今時の式を調ふ」

⑤「久々津舞を幕の中に出し、左に旋り右に旋り海の上に浮ぶ。音々の伎楽を船の頭に奏で、竜頭鷁首を浪の間に飛す。又、騎兵惣二百四十人のうち、宮・国各一百二十人は凶霊の余執猶在り、此の悪事を防がしめん為なり。又虚空蔵等の四箇寺は、各徭三人、船一艘駒犬二頭を調進せしむ。各々当寺の仮堂を造進し、面々本仏の影像を安置す。鱗貝・直米等は、郷々より立用する所なり。此の御船は会訖て頓宮に還らしむ」

史実と伝説が入り交じった資料である。

①は隼人の乱に対して、豊前国の国府軍が八幡神を守護神として奉戴して日向大隅両国の鎮圧に向かった。豊前国と同様、北部九州の各国から鎮圧のための軍勢が出たのであろう。しかし、最後まで抵抗を続けたのが曾於の石城と比売の城であったという。ここに曾於という地名が出てくる。大隅国の隼人の根拠地のひとつだったのであろう。

豊前国軍に奉戴された八幡神には、法蓮などの僧侶が随行したという。八幡神は神仏習合を極めて早い時期になしとげた神であった。そのため、仏教的奇跡譚に満ちている。

②では隼人の乱を契機に、八幡宇佐宮が放生会を行うようになったことを記す。

③では、八幡神と従軍した僧侶たちが隼人の乱での殺生の罪を贖うために、弥勒如来や薬師如来、虚空蔵菩薩、如意輪観音、薬王菩薩を祀ったという。その後、八幡神自身が八幡大菩薩と呼ばれるようになり、平安期には本地垂迹説によって八幡三神は阿弥陀三尊を本地仏とするようになる。死後の救済を専らとする阿弥陀如来となった八幡神は、敵対し

た隼人の戦死者の霊を弔うようになるのである

④と⑤は八幡宇佐宮の放生会のありさまを述べている。放生儀礼を行うために、当時の海岸線近くの寄藻川のほとりにある和間まで神幸するのである。まさに「浜下り」である。

三　弥五郎どんに寄せる思い

『三国名勝図会』の岩川八幡神社の項では「此人形は土人伝へて大人弥五郎といひ、又武内宿禰なりという」と書かれ、的野正八幡宮の項には「上古大隅隼人の征討の故実なりといへり。其権輿詳かならず」と記されている。

大隅国と日向国での大人伝説では「弥五郎」名の大人が突出して多く、岩川八幡神社の弥五郎どんのことを「上古大隅隼人の征討の故実なり」と述べているにもかかわらず、故実の具体的な説明をせずに「其権輿詳かならず（その発端は詳しくはわからない）」と記している。これは不確かな伝承であるためなのか、それともわざと曖昧な表現にしたのかは不分明だが、これらの記述から、近世後期には弥五郎どんを叛乱を起こした隼人の指導者と地元では考えていたと推測できる。ただ、国学が盛んになっていた近世後期、天皇至上主義のイデオロギーの許では、弥五郎どんが王権に逆らって叛乱を起こした隼人の指導者だったとは書けなかったのではないだろうか。

柳田は『一つ目小僧その他』で「弥五郎は中古に最も普通であつた武家の若党家来の通り名で、それだけからでも神の従者であつたことが想像せられる。而うして（それから）大人彌五郎の主人は八幡様であった」と述べている（10）。古くから大隅正八幡宮の影響下にあった地域では、大隅日向隼人の乱での八幡神の関与から、弥五郎どんが八幡神の従者であると考えられていたのであろう。それは隼人たちの律令体制下への同化の影響だと考えられないだろうか。

『三国名勝図会』では、岩川八幡神社の弥五郎どんは「又武内宿禰なりという」と記されている。的野正八幡宮には武内宿禰と考えられていた頃の弥五郎どんの白い老人面が残されている。『日本書紀』によれば、武内宿禰は景行・成務・仲哀・応神・仁徳の五代の各天皇に仕えたという伝説の人物で、神功皇后とその子応神天皇との説話でよく知られている。弥五郎どんが八幡神の伴神としての武内宿禰にされたのは、これも国学の影響だと考えられる。

『三国名勝図会』巻之三十一の大隅国の総説に「景行天皇の御宇、大人の隼人といへるもの、其容貌夜叉の如く、大逆無道にして、一族数千人を集め、隼人城と土井城に拠て、一に王命に従わず」と記されている。奈良時代の隼人の乱よりも古い伝承である。「大人の隼人」というだけで、名前こそないが、この「大人の隼人」は、現代の弥五郎どんのイメージと重なるのである。

『三国名勝図会』では野口村枝之宮（現霧島市国分野口東の枝宮神社）に大人弥五郎別名川上梟師の四肢を埋葬したと伝える。また、明治三十一年（一八九八）に刊行された『薩隅日地理纂考』第十九巻野口村の項に「四肢（ヨツマタ）神社　土人相伝ヘテ曰、日本武尊熊曽梟帥ヲ誅戮アリテ、其手足ヲ四ニ裂キ、四所ニ分チ、埋ミシ其一所ナリト云ふ、一所ハ同郷福島村ニアリテ、其二ハ詳ナラス、一説ニ熊曽梟帥カ霊魂祟ヲナス事甚シカリシ故ニ当社を建立シテ神ニ崇メ、彼福島村ナルハ彼カ持タリシ弓矢ヲ瘞（埋）メシ跡ナリトイフ」と記されている。

この伝承では、日本武尊によって殺された熊襲の指導者梟帥が怨霊となり、激しい祟りを起こしたために祀った神社だというのである。

柳田国男は弥五郎の「五郎」は怨霊を鎮魂して守護神化した「御霊」に由来する名前であると考え、『妖怪談義』の「大人弥五郎」には、「弥五郎の御霊といふ思想中に、国魂即ち先住民の代表者ともいふべき大人に対する追懐若しくは同情を包含して居た例がありとすれば、愈々以て我邦民間に於けるこの種信仰の由来古いものなることが察せられるのである」と記している(11)。

四　岩川八幡神社の弥五郎どんとホゼ

岩川八幡神社の例祭のことを、地元の人たちは「ホゼ」と呼んでいる。この呼称は八幡宮特有の祭事である「放生会」に由来するとも言われるが、現在は生き物を自然に放す放生儀礼は行われていない。ただ、岩川八幡神社では古くは川の合流点、いわゆる水辺まで浜下りしていたし、今でも的野正八幡宮では池の傍らにある池之尾権現宮まで浜下りする。しかし、山之口弥五郎どん祭りや田ノ上八幡神社の弥五郎人形行事でも放生儀礼はない。祭礼の時期としては、米の収穫祭として神に感謝する祭であることは間違いない。豊穣を祈願する祭事だからホゼという説もあるが、前提となる豊穣祭という詞があったかどうか不確かな面もある。八幡神発祥の地である宇佐では、放生会は宇佐神宮の神幸祭である。そして、奈良時代の大隅日向の隼人の乱による多数の戦死者の霊を供養して、豊作を確かなものにするという意味を持つ神幸祭であるとされている。放生儀礼こそないものの豊作祈願の放生会（神幸）が訛って、ホゼになったと考えても良いのではないだろうか。

五　田ノ上八幡神社の弥五郎様

岩川八幡神社の弥五郎どんのような隼人の指導者像でなく、八幡神の勧請をした人物像だとするのが、飫肥の田ノ上八幡神社の弥五郎様である。『日向地誌』に「板敷神社（中略）神社考ヲ按スルニ往昔大隅国桑原郡（現鹿児島県霧島市の一部と姶良郡湧水町）ニ稲積弥五郎ト云者アリ、彼地一宮正八幡ノ神体ヲ負ヒ来リ、比ニ鎮座ス（中略）偶人弥五郎ハ稲積弥五郎の縁故ナリト言伝フ」と記されている。ここでは弥五郎は桑原郡の住民で、一宮正八幡（かつての大隅正八幡宮、現在の鹿児島神宮）の神体を背負って持ち来たりて、田ノ上八幡神社として祀ったというのである。弥五郎が稲積という苗字を持っていることに注目したい。稲積とは稲束を積んだもので、穀霊の依りつくものである。そのため、稲積山と呼ばれる山の多くは円錐形の山容を持ち、田の神などの神々が降臨する甘南備であるとされる。稲積山と呼ばれる山は、熊本県山都町、大分県宇佐市、大分県豊後大野市、香川県観音寺市、島根県益田市、島根県出雲市などにあり、深山ではなく水田のある里近くの低山である。このことから、稲積弥五郎とは田の神としての性格を持つ伝説的人物だと考えられる。その「縁故」者が偶人弥五郎だというのである。どのような縁故なのかは記していない。伝説の稲積弥五郎と偶人弥五郎との関係は明らかではないが、多くの人たちは同一だと考えていたのではないだろうか。

六　文化財としての弥五郎人形行事

現在、三ヵ所の弥五郎人形行事は、いずれも県無形民俗文化財に指定されている。平成元年（一九八九）二月二十七日には、当時未指定だった宮崎県下の的野正八幡宮と田ノ上八幡神社の弥五郎人形行事を、文化庁は「日向の弥五郎人形行事」として、記録等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択している。

「大隅町岩川八幡神社の弥五郎どん祭り」は、昭和六十三年（一九八八）三月二十三日に鹿児島県指定無形民俗文化財に指定された。 的野正八幡宮の「山之口弥五郎どん祭り」は平成二年（一九九〇）三月二十七日に宮崎県無形民俗文化財に指定。「田ノ上八幡神社の弥五郎人形行事」は、平成三（一九九一）年三月十五日に宮崎県無形民俗文化財に指定。このように三ヵ所の弥五郎人形行事は、地域の文化財として保護されることになったわけである。

平成三十一年（二〇一九）の文化財保護法の改正によって、文化財の保存と共に活用が重要視されるようになった。活用は観光分野だけではない。町おこし、いわゆる地域振興に用いて、地元住民の対象文化財への意識を高め、地域のアイデンティティーを醸成することも活用のひとつである。このような視点で、岩川の弥五郎人形行事を見てゆきたい。

岩川八幡神社における神幸行事の場合、「弥五郎どん祭」という呼称で、地域起こしのイベントも同時に開催されるようになったことである。昭和四十一年（一九六六）から大隅町商工会青年部が弥五郎どん祭を主催するようになり、昭和六十一年（一九八六）頃から、各地に出かけて弥五郎人形を曳くことが多くなり、全国的な知名度も高くなっていった。平成七年（一九九五）には旧大隅町が「弥五郎伝説の里」という施設を作ることによって、いつでも多くの人たちに弥五郎どんを周知させることができるようになった。また、小・中学校の児童生徒向けの『創作 やごろう物語』を刊行し、弥五郎どんを地域の英雄として位置づけていった。

現在、岩川八幡神社の神幸行事に合わせて、弓道・剣道・空手・相撲などの武道大会が行われ、運動公園弓道場での弓道以外は隣接する旧岩川小学校の校庭で実施され、多くの人たちが集まる。また、少女バレーボール大会や高齢者のゲートボール大会などのスポーツ大会も開催される。正午前後には市内パレードも行われ、文化部門では中央公民館での文化協会作品展や大隅文化会館でのど自慢大会・演芸ショーが開催される。また、前日の夜には、大隅文化会館で前夜祭が催され、小中高合同の吹奏楽演奏などが披露される。

このような多彩な催し物の開催と同様、弥五郎どんの巡行も多くの見物客たちで賑わう。岩川八幡神社下の鳥居から出てくる弥五郎人形も見所のひとつであるが、見物客が最も集まるのが、弥五郎人形が通過するバイパス高架橋下周辺である。立ったままでは、高架橋下を通過できないため、弥五郎人形を仰向けに斜めに倒して通過させる。これを「弥五郎どんのイナバウアー」と呼んでいる。平成十八年（二〇〇六）のトリノ冬季オリンピックでイナバウアーを得意とする荒川静香選手が金メダルを獲得して日本人を熱狂させ、イナバウアーはその年の流行語大賞にも選ばれている。この日本人なら誰でも知っている言葉を上手に利用したのである。本来だと、弥五郎人形巡行の最大の障害となったはずの高架橋を、巡行の見せ場に転換してしまったのである。

イベントとして肥大化しすぎた観もあるが、文化財である「大隅町岩川八幡神社の弥五郎どん祭り」は、地域社会全体で参加して支えてゆくという構造が成立しているのである。

【注記】

注１：『宮崎神社誌』敬神会編・敬神会刊行・一九三二年

注２：『日向地誌』平部嶠南著・日向地誌刊行会・一九二九年

注３：『目で見る 宮崎・日南・串間の一〇〇年』株式会社郷土出版社・二〇〇一年

注4：『薩隅日地理纂考』鹿児島県市立教育会編・一八九八年／国立国会図書館デジタルコレクション

注5：『三国名勝図会』薩摩藩藩主島津斉興が、橋口兼古・五代秀堯・橋口兼柄らに編纂を命じ、天保十四年（一八四三）にまとめられた薩摩藩領の地誌／復刻版：南日本出版文化協会・一九六六年

注6：『日向地誌』飫肥藩家老だった平部嶠南が、明治八年（一八七五）に宮崎県地誌編集係に任命され、明治十七年（一八八四）に完成させた地誌／復刻版：青潮社・一九七八年

注7：『日本書紀』養老四年（七二〇）／「日本古典文学全集六八」岩波書店・一九六五年

注8：『続日本紀』延暦十三年（七九一）／『続日本紀（上）全現代語訳』宇治谷孟訳・講談社（学術文庫）・一九九二年

注9：『八幡宇佐宮御託宣集』神吽・正和二年（一三一三）編／重松明久訳・現代思潮社・一九八六年

注10：柳田国男「ダイダラ坊の足跡（大人弥五郎まで）」『一つ目小僧その他』定本柳田国男集 第五巻・筑摩書房・一九六八年：初出『中央公論』一九二六年

注11：柳田国男『大人弥五郎』定本柳田国男集 第四巻・筑摩書房・一九六八年：初出『郷土研究』一九一七年

【参考文献】

・『大隅「岩川八幡神社の弥五郎どん祭り」調査報告書』鹿児島県曽於市教育委員会・二〇一一年

・『日向の弥五郎人形行事調査報告書』宮崎県都城市教育委員会山之口生涯学習課・二〇一七年

・『日置八幡神社 デオドン（大王殿）再生事業 調査研究報告書』デオドン（大王殿）再生事業実行委員会・二〇一九年

・山口保明『「弥五郎どん」とは何者か』みやざき文庫四六・鉱脈社・二〇〇七年